

国頭村へき地東2校(安田小・安波小) 校内研修

校内研テーマ: 伝え合う力を育てる授業研究

～ 少人数の特性を活かし学びが生まれる授業づくり ～

(1) 単元名: 1年: ひき算(2) 3年: 「何倍でしょう。」

(2) 本時の目標: 1年: (十何) - (1位数) で、繰り下がりのある場合の計算の仕方を考え整理し計算ができる。

3年: オペレーター(変量)に着目し、何倍なるかを考えて問題を解くことができる。

☆文中の児童生徒の名前は全て仮名である。

[少人数の良さ VS 少人数のハンディとリスク]

授業は1年生の男子1名と、3年生の男子1名である。授業者と3名の授業に、隣の安波小の先生方と私が加わり、大人10名に児童2名の授業研究会である。この状況がへき地なのである。受け入れるしかない。これが国頭村の限界過疎地域の現実である。



授業者はへき地3年目の教師で、さすがの「わたり」の授業を拝見させてもらった。

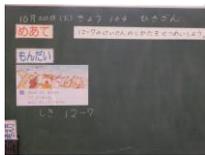
児童は2人だが教育を受ける権利「学習権」は日本全国

すべての子ども達に平等に施されなければならない。複式の授業で、しかも1年生と3年生というさらなる特殊な環境である。授業デザインのコの字型やグループ活動(メソッド)と考えると明らかに不可能である。では、どうするか? 学びの共同体は理念とビジョンの実践である。たとえメソッド(方法論)がかなわなくても、理念やビジョンを先生方で共有し、未来に向かう子ども達と一緒に教師も育っていこうと考えてほしい。「協同と対話」については、特別活動や道徳の授業など発達段階の違いから子ども達なりに考えだされる「気遣い」等に私たち教師にとっても多くの学びと出会える機会となります。また教育課程外の日常の学校生活においても可能な限り、個の尊厳が受け入れられ、互いが支え合い創造していく民主主義と平等を追求した学校経営を全職員で目指してほしい。

「良さ」にも達成のためのリスクがあり、さらに限界過疎地域であることのハンディをすでに持ち備えている。へき地のハンディやリスクと戦うのではなく、両者を受け入れて、「ここならではの」教育を施してほしい、その指標として「学びの共同体」の理念を国頭村は進めているのである。

[1年生]

一人でやらざるおえない。見ている心も痛むがこの現実から



逃避はできない。「わたり」の授業の成立のため授業者の教具準備もまた、二人分である。



へき地は人数が少ないから「楽」でしょう? そんな無神経な言葉と出会うときがある。我々は「楽」を求めて教師をしているのではない、



こんなへき地からでも、社会にでた時に困らない子を育てることがここでの教師の使命となるのです。

[3年生]



手厚く相手できるのが少人数の良さだというのが、この一人が理解しないとどうにも進めないという難しさがある。しかも常に1対1なので子どもだって辛さがあると考えられる。この子の「わからない」辛さや、「わかった」喜びを共有できるのは教師しかいないのである。授業者は以前から秋田の「学び」スタイルの授業を進めている。ここで子どもの発言を聴いてあげられるのも授業者一人である。絶妙な「わたり」の空間の中で、子ども達は算数的活動と算数における「僕の考え方」を教師に向かって語る。・・・未来に向かって語れ!

[授業研究会参加者より]

- ☆ 子ども達、投げ出さずによく頑張っていた。ジャンプの課題(確かめ問題)がよかった。
- ☆ 授業を見せてもらう機会の提供に感謝します。互見授業が互いの学びをつくってくれる。感謝します。
- ☆ 授業者の「わたり」のうまさ → 「間」の使いわけ、かかわりのタイミングと一人学習の設定
- ☆ 事前の教材研究が良かった。日常の授業から板書とノートを大事にしてほしい。

O・M先生お疲れさんでした。素敵な授業のおかげで協議会も盛り上がってくれました。教師が二人の心のよりどころになっている。優しく突き放すスキルも必要かな?

国頭村へき地西三校合同授業研究会



国頭村奥と言えば？近況は「このぼり祭り」が知名度が高いようにあるが、まだまだあります奥の魅力、まず、戦後貧しい沖縄の集落の各地に創設された「共同売店」の第1号店が奥集落である。まさに共同の精神発祥地である。次に左写真、沖縄県国道58号線の起点地である。右写真、共同の精神で育まれる奥小学校全校児童。みんなが「自分らしさ」を発揮できるやさしさにつつまれる。



2年国語 授業者：N・S先生 単元：さが大きくなるまで

本日は、へき地西3校の合同研修会である。子ども3人を見つめる大人が10名以上いる。授業者は4月に赴任しいてきた。日常の生活から、戸惑いや不安、あるいは田舎の不思議がいっぱいに困惑していることが容易に想像できます。焦らないでくださいね、まずは何より先生がこのへき地の環境に慣れることです。今の自分の立場を上手に受け入れて、子ども達と楽しんでください。



へき地でも2人いれば十分「学び合い」は成立します。これまで、奥小でも多くの学び合う授業が実践されてきました。ぜひ「国頭学びの会ゆい」のHPリフレクションシートで他のへき地校の実践も参考にしてほしいです。今日の先生の心境は、へき地校に赴任されたすべての教師が経験するのです。わたしだけが特別でないことに安心してください。さて、今日の授業子ども達が一番学び合っていたのは、黒板で、写真を叙述に合わせて並び替えているところでした。いずれ「学びって何？」が観えてくると思います。ゆっくりと…



6年算数 授業者：H・S先生 単元：比例と反比例

二人しかいない。男の子は4年生の時の転入である。ここでも今年赴任してきた教師が奮闘する。

「学びって何だろう？」、これまでどうやっていたんだろう。近隣校との合同の校内研究授業だが、授業のイメージが浮かばない。不安と迷いの中の授業研である。子どもは2名いるが、お互いに譲らない頑固な関係にあるという。依存や困り感に寄り添う気配がうかがえない。本日の授業も、問題解決的な学習で、お互いの考え方を黒板で共有して終わりの、ごく普通の解決型授業であった。



授業は、どうにか「きき合ってくれないか」と授業者の不安と期待に揺らぎながら淡々と進行していく。私の参観は、授業の後半からであったが、残念ながら二人で向き合って協力して探究に向かう姿は確認できなかった。「どうすればいいんだろう。」授業者の新たな不安が生まれる。この瞬間をネガティブに考えるのではなくポジティブにとらえてほしい。つまり「どうしよう」は授業者が授業研究の入り口に立った瞬間であると考えよう。必ずできるようになります。事実、4年生の時には、お互いに支え合っ



て問題の解決の向かっていたのである。今日の授業からの改善のヒントは、子どもの発言が全て教師に向けられていたこと。教師が優しすぎる。一人では解決できない問題を提供すること。聴き合うは徹底すること。黒板での発表にこだわらないこと（対話的コミュニケーションの機会とする。机への上で学ばせる）

〔国頭村すべてのへき地校の先生方へ〕

- ☆ 未来を見据えて育てる。⇒ 社会へ出ることが前提 ⇒ まずは国頭中へ（一つになる）
- ☆ 学校の役割・教師の使命 ⇒ 学校は誰のためのもの ⇒ 学校の公的役割ってなに？
- ☆ 方法論（スキル）より共同体の理念やビジョンを大切にすること ⇒ 形には限界がある
- ☆ 前任の教師たちの理念の継承 ⇒ 子ども達のために ⇒ 国頭村の特性を生かす
- ☆ 一人ひとりの「学び」の継承 ⇒ 仲間との出会いを提供する ⇒ 集合学習 ⇒ 小学校交流学习
- ☆ 支援とは？ ⇒ 安全に転ばせる。優しく困らせる ⇒ 一人では学びは発生しない
- ☆ 学び合う相手がない⇒ 教師が相手するしかないだろうか？ ⇒ へき地校の研究の方向
（例） 道徳・特別活動（他者との違いから学ぶ） 国頭学びの会ゆい